

「吉川五明」

店の店名「五明」は、江戸時代の俳人「吉川五明」よりその名前を頂きました。吉川五明は秋田蕉風の祖と仰がれ、六百名を超える門下を従えた秋田の俳人で奥州四天王の一人です。



◆「吉川五明」年表

- 享保16年(1731年) 秋田城下茶町菊之丁の豪商、那波三郎右衛門祐祥の五男として生まれる(幼名 伊五郎)
- 享保4年(1747年) 吉川可雲と俳句を作りはじめる
- 寛延元年(1748年) 豪商吉川惣右衛門吉品(可雲の父)の養子となる
- 宝暦12年(1762年) 俳号を『五明』と改める
- 安永3年(1774年) 芭蕉没後80年に八橋宝塔寺に記念碑を建立し供養を行う
- 安永3年(1774年) 佐竹義敦藩主が鷹狩に出向かれた時に五明の庵に立ち寄る
- 安永4年(1775年) 宗家吉川吉敏藩主から御紋の羽織を頂き宗家の留守を守る
- 天明2年(1782年) 旧庵(風月亭虫二房)に手を入れて《小夜庵》と名付け入庵
- 寛政3年(1791年) 佐竹義和藩主を小夜庵に迎える
- 寛政5年(1793年) 芭蕉百回忌に八橋菅原神社に芭蕉翁塚を建立する
- 寛政12年(1800年) 佐竹義和藩主より芭蕉の句一軸と金千疋を賜る
- 享和3年(1803年) 73歳でこの世を去る。八橋帰命寺の墓に葬られる
- 文化元年(1804年) 五明碑が宝塔寺境内に建立「日向あり陰あり芭蕉静かなり」の句が刻まれる
- 昭和54年(1979年) 秋田市指定文化財となる

◆「吉川五明」人物像

吉川五明(1731-1803)は奥州四天王のひとりで、秋田蕉風の祖と仰がれ600名余りの門下生を従えた秋田の俳人。20代の頃に日本歌仙会にて勝したことで田舎者の自分が晴れの場合で勝ったという流行の俳風に疑問を抱き、蕉風の研究に組みはじめ。京都から蕉門の俳書をすべて取り寄せ独学。芭蕉復帰運動を行っている。生涯で六千以上の作品を残しており、蕪村の二千八百余り、芭蕉の千余りと比べても多いことがうかがえる。

五明は社交的で一流の俳人たちと広く文通をしており、蕪村や一茶とも親しかった。その交流の広さから凶作の時には五明が住む秋田の苦悩を見かね、わざわざ下総(千葉)より美丸法師がアップラ(馬鈴薯)の種を持参し訪れている。五明は菜園にて成功させ、佐竹領での馬鈴薯栽培が盛んになったきっかけをつくったことでも有名である。

また、俳号「五明」は扇の別名、佐竹家の紋所が五本の骨組からつくられた扇でありその関係から好んで使用していたことから、佐竹家との親交の深さもうかがえる。五明の父、那波裕祥は佐竹藩から外町の屋敷をもらい御用商人として財を築いており五明が生まれた頃には富商として重役をになった人物であるが五明が17歳の時に他界、その後吉川家の養子となるが20代の頃には養父も亡くし義弟を後見にして家業に精励している。後に父の代をはるかにしのぐ豪商となっていることから商才は非凡であった。

五明は指導力と包容力を兼ね備え、多くの才能の持ち主として人々に愛され、東北の田舎に居ながら全国的に認められ一流となれたとされている。現在、帰命寺は無くなり五明の墓もその姿を消したが墓の中の遺骨は秋田市大町の真敬寺にある吉川家の墓に移されている。秋田市八橋にある宝塔寺には五明の碑と芭蕉塚が並び建立されている。



宝塔寺(秋田市八橋)



五明の碑と芭蕉塚

吉川家のすぐ傍にあった秋田市川尻総社神社の境内には名句《鳥の糞》の句碑が建設されたが時代と共に風化。五明の遺作だけは吉川家の子孫が防空壕を掘り戦火から守り、虫干しをしながら大切に保存してきた。それらは秋田市指定文化財になり、秋田市明徳館本館にて保管されている。

◆「吉川五明」代表作品



象潟や森の流るる朝かすみ	鳥の糞 ^{ふん} 地に音高し夏木立	日向あり日陰あり芭蕉静かなり	降る中へ降り込む音や小夜時雨 ^{しぐれ}	菊の香は妻にまかせて忘れけり
--------------	----------------------------	----------------	-------------------------------	----------------